

肝付町に行かせていただき学んだこと

の、きー♪

○印象に残ったこと

～バスの中編～

・保健師さんの戦国時代レベルまで遡った地区の歴史への理解

→風土とそこに根付く人々の考え方の理解へのヒントになっているのかもしれない。

・医師の往診を1か月に一度の頻度でさえ行うことが難しい地区に、往診ができたときの話。家から数時間かけて通う病院での診察では会話も成り立たない80代の男性Aさんは、家での診療の際には冗談も言えるほど落ち着いていた(妻が知っている普段通りのAさん)

→Aさんが医師の前で、病院にいる時とは違う、普段通りの姿を見せることができた理由の一つに住み慣れている「家」という環境の力があるかもしれない。病院で見せる姿が普段の姿と違えば、正確な情報が得られず、家での生活に沿った健康指導をするための適切なアセスメントはできないかもしれない。人間が自分を表現するということにおける「環境」の重要性に改めて考えた。

・住民や行政が行っている獣害への対策の理解や住民の交通事情に対する事業(相乗りタクシー)への理解

→農業は地区の人々の多くが行っている産業。住民が農業において苦しんでいることと、それに対して考え実行している対策を知ること、考えることはつまり住民の生活の一部を理解しようとする事なのだろう。交通事情も「健康」を形作る一つの要因であった。病院へ行く手段、食べるものを買うに行く手段、会いたい人に会いに行く手段などであるから。また、公共交通機関はコミュニティのつながりの場でもある。相乗りタクシーの制度は高齢者の運転免許返納に対する事業の一つでもあるかもしれない。

・世界一愛されるロケット発射場！住民の理解と協力の下で完成した射場、婦人会の人たちが研究者たちのために作った民宿、道路の整備など、思いやりの詰まったロケット発射場。失敗が続いた後の打ち上げ成功に込められた宇宙開発事業関係者だけでなく内之浦の皆さんの思い

→住民同士、住民と研究者など、人と人のつながりがあってこそそのロケット発射場なのだなと感じた。そのつながりや創り上げてきた思い出が故郷への思い入れになるのだろう。世界一愛されるロケット発射場といわれる所以が分かり、心が温まった。同じロケット発射場のある自分の故郷を思い出し、自分の町ではどのような物語があつてロケット基地ができたのだろうかと思った。

・ロケット打ち上げ時の射場周辺の住民の避難

→自分の故郷の種子島では、ロケット発射場の射点から3キロ圏内は警戒区域とされ、元々

その区域に住んでいた人たちは立ち退いていて、ロケット発射の際に避難をすることはなかった。打ち上げの際に避難をするというのはとても新鮮だった。避難する場所や、経路、時間などを考え住民に知らせること、避難後の健康管理など、保健師としての役割が重要である場面だと思った。打ち上げは年に何度かあるので、「避難をする」ということ慣れることが出来ているというのは、災害時の避難のイメージが付きやすく、住民も保健師もスムーズに行動できるのではないかと考えた。

#### ～大浦地区での出会い編～

##### ・最年少（70代中盤）の、地区を支える男性

→地区に住んでいる住民を見守る義務があると使命感や責任感を感じているようだった。大浦地区の事について考えることがこの方の生きがいや生きる目的の一つになっているように感じた。それゆえに、自身の健康にはとても気を使っていて、健康への意識は高いようであった。大浦地区にとっては、住民の健康に問題が発生した際に力になったり、外部との窓口になったりと、頼りになる存在であるようだった。保健師さんが大浦地区をアセスメントするうえでキーパーソンとして、重要な役割を果たしているようだった。

##### ・お話しをさせていただいた女性の、家族や人生についてのお話

→子供や孫との思い出や現在の生活、想う気持ちなどを話していただいた。家族が、お互いを大切に想い合っていることが分かった。自分の親や祖父母のことも思い返して、自分が生きていくことを支えてもらっていることを、改めてありがたく感じることだった。「人間はね、良い風に考えて生きていかないと」という言葉が印象的だった。辛いことがあっても前向きな気持ちになろうとして生きていくことが、人生を充実させるための一つの方法であるのだろうと思った。80年以上生きた人生の先輩からの言葉は重く受け止めることが出来た。

##### ・大浦地区に住むみなさんの関係性

→住民の皆さんは、お互いに「家族みたいなもの」とおっしゃっていた。人口11名の小さな集落だからこそその団結力があるようだった。普段から畑に行ってあった時に話したり、家に遊びに行ったり、今回のように学生などが見学させていただきに来た際などに集まったりと、関わりは密でありお互いのことをよく分かっているようで、とても仲の良い印象を受けた。

#### ○まとめ

大浦地区は、とても狭い道の先にある小さな集落であった。肝付町の中心部から車で100分程もかかり、買い物ができる商店のある近くの集落まで行くのも車で50分はかかるようだった。みなさんは、週に1,2回車に乗り合わせて買い物に行ったり、畑で作った野菜を食

べたり、それぞれの家庭にある大きな冷凍庫などに肉や魚を保存するなどして生活をされているようだった。歩いて数分の場所に大きなスーパーがあり、いつでも好きな時に買い物ができる現在私が住む環境に比べると、一見不便に思える暮らしではある。私は18年間離島で暮らしていて、車で15分かけて買い物に行ったり、畑で採れた野菜や、父が海で採ってきた貝や魚などを貯蓄し食べたりしていたので少し似たようなものを感じた。今の暮らしに比べれば不便であると感じるが、当時、不便と感じて生活をしてはいなかった。その暮らしが私たちにとって当たり前だからである。なので、長年暮らしてきた大浦地区の人々も、暮らしを不便だとは感じないだろうと思った。毎日の、当たりの暮らしをしているだけである。最年少が70代で、住民の皆さんのお子さんやお孫さんが集落に帰ってきて暮らすようなことはないだろうと聞いた。このままだと、数十年後には、住む人がいなくなる集落になるだろう。もっと便利な暮らしができる所があるとは分かっているが、最後まで大浦集落に住み続けたいと思うのも、自分にとっての当たり前を暮らし続けるということが、人間誰しも思うことだからではないかと思う。大浦地区の皆さんとお話をさせていただき、住み続けている故郷は、その人の生活や人生がたくさん詰まった、生きているカタチそのものでもあるのではないかと、改めて感じた。暮らしを営む人間を対象とし、その人の健康のための環境を整える看護職を目指す者として、暮らしの基盤である地域に対する人々の思いと向き合えたのは大きな財産になったと思う。